

はじめに—実践研究（１）；「軸」に戻る—

日本語教育実践研究（１）は、「学習者の多様化」、「支援者や学習の場の多様化」を踏まえ、多様さに直面したとき私たちは「日本語教育」をどのように展開していけるか、を課題として実践研究を進めています。その場が、『にほんご わせだの森』という「教室、のようなもの」であり、受講生は「地域」と「ことば」と「教育」をめぐる自ら考え自らの実践を組み立てていきます。2011年度春学期は受講生４名が全９回の実践を、秋学期は受講生１名と聴講生１名が全１１回の実践を実施しました。

それぞれ話し合いを重ねながら

- ・教室の**デザイン**…目標設定、物理的な環境作り、学習者の募集
- ・教室の**運営**…目標設定、学習活動の決定、教材などの**開発**、活動の**実施**、

内省、評価

- ・『わせだの森』から見られた諸問題の把握と**分析**
- ・諸問題と「日本語教育」との関連についての**考察**

を進めていきました。また、『わせだの森』という学習コミュニティを運営し維持していくために、受講生たちは、実践研究の授業時はもちろんのこと、授業外にも多くの時間を割いて議論をしたり教材を準備したり、また、学外に出かけていって「ちらし」を配布したりしました。自ら考え自ら実践を組み立てていく理念を具現化するプロセスでは、学習者も受講生もボランティア参加者も、共に様々な学びに出会えたようです。特に、実践者である受講生はそれぞれが「多様性」と向き合い、自分自身の「教育観」と向き合い、実践を形にしていきました。今回、その成果をまとめてご報告いたします。

2011年度は、土曜の午後と平日の夜の時間帯を活動の時間に充てたところ、平日だけの参加者、土曜だけの参加者、そして、両方に参加する人も見られました。春学期は「過去、現在、未来」が、秋学期は「伝え合い」が実践の軸になっていたようです。しかし、「軸」に据えてみたはいいけれど、いったいこれは何を意味しているのだろう、具現化するにはどうすればいいのだろう…。活動案の作成時や活動後の振り返りでこの問いは繰り返されました。ぐるぐると議論は巡り思考は巡り、拡散したら「軸」に戻る、なぜ、これを「軸」としたのかを再度問い直す作業が続きました。今後、受講生たちはそれぞれに『わせだの森』とは異なる自分自身の実践研究を進めていくこととなります。であるからこそ、そこで出会う課題と問いに相對したとき、「軸」に戻る作業をした経験はきっと役に立つでしょう。それは、だれに言われなくても、自分の日本語教育観を自分自身で確認する作業となるからです。

2012年3月

早稲田大学大学院日本語教育研究科
日本語教育実践研究（１）担当
池上 摩希子